

学生相談室報告(3)

額 額 康 兵

Report from the Counseling Room (NO.3)

Kohei KOKETSU

This is the third annual report of the Counseling Room of which was founded in April, 1977. The report has four sections : 1) College Educations and Counseling, 2) Changing View of Students and Raison d'Être of Counseling, 3) the Statistics of the Counseling Room from April, '77 to Jan., '80, 4) Conclusion.

I. 大学教育とカウンセリング

本学に学生相談室が設けられて3年になる。学生に対するカウンセリングとは何であるか、という問いかけがいつも心を占めている昨今である。最近では、正常人々つまり日常生活を支障なく過している人間に対するカウンセリングについても関心が払われるようになってきている。日本においても、カウンセリングとは病院や特別のクリニックなどで心を病んでいる人達に対してのみおこなわれるものであるという誤った認識はぜひ改められたといえる。

カウンセリングとは、治療ないし矯正の機能だけでなく、教育的・修正的・可能性の開発という側面をも併せもっていることに注目して頂きたい。特に大学における学生相談は、後者の機能を十分に発揮できることが望ましい。学生に対するカウンセリングは、大学の教育理念、具体的に教育の年間計画などと密接にかかわって成り立っていくものである。言い換えれば、学生相談とは、何か問題を控えている学生にのみ必要なことではないし、何か問題が起きた時にのみ必要とされるような存在であってよいというものでもない。全学の学生一人々々が4年間(あるいは、プラス・アルファ年というのも現在では珍しくもないが、)の学生々活の折々に利用し、各自の心の成長に幾分なりとも助力となり得る存在であることが理想である。個々の学生が知的・情緒的に調和のとれた健全な個性を伸ばしていくことができるよう助けとなることができれば相談室の意義は大きいものと考えている。

教育、特に大学教育について種々の問題があり、それも年々増大していくばかりであり、建設的かつ速効力のある方策はなかなか難しい。カウンセリングもまたしかりである。大学におけるカウンセリングは、学生の個性

と能力を最大限に発達させるための援助を主目的とするのであるならば、これは同時に、教育の目標とするところとも一致するものである。つまり、前述したように大学の学生相談室で取扱う問題と病院などで対象とする問題には異質の要素があるという点を明確にしておきたいのである。大学におけるカウンセラーの役割は、少数の異常学生や問題学生への対処よりも、むしろ大多数を占める一般学生が抱いている種々雑多な問題に取り組んでゆくべきではないかと考える。例えば、心的障害の程度が著しくて専門的かつ長期的な治療が必要なケースについては、適切な施設への紹介の労をとるが、大学としては高度な心理療法やその他必要な治療のために設備や専門担当者を常駐するなどというアイデアは現実から遊離した議論を生むにすぎない。極端なケースを主として追求していけば学生相談の本来の意味は容易に見失われてしまうであろう。本学の学生相談担当者としての筆者の3年間にわたる経験からみても、これは陥入りやすいエア・ポケットであり、異常なケースに時間の大半を費やし、振り回される危険が常に隣合せている。カウンセラーと精神科医が同一人である場合にはこれも可能であるが、二者が同一人である例はきわめてまれである。カウンセリングとは治療よりも、予防的な側面を受持つものであることを自戒をこめて銘記しておきたい。

II. 学生の価値感とカウンセリング

さて、前置きが長くなったが、それでは実際にカウンセリングをおこないながら日頃考えてきたことを中心に述べてみたい。まず、カウンセリングの対象である当今の学生について感じることであるが、約20年前筆者が学生であった頃と比べると非常に大きな相違がある。教員

と学生との間によこたわる価値感の相違こそが、現在どこの大学においても論議の焦点となっている問題の原点ではないだろうか。1960年の「安保闘争」以後、学生の意識は大きく変った。'60年代後半に世界各地で起きた学生運動は日本でも例外なく吹き荒れた。そして'70年代、学生の意識や価値感はおおいそう変った。勿論、経済の高度成長の波に乗り社会そのものが価値感を変えていったのであるから、学生の変化もしごく当然の現象であるにすぎないともいえる。むしろ、この激動の流れの中でも依然として同じようなイメージしか描くことをしなかった我々教員の側こそ驚きの対象となるにふさわしいかもしれない。時代の変化を肌で感じて新しい方向に向っている、あるいは流されている当節の学生の価値観と、変らないままの教員の価値感という二つの異質な流れの中に立っているのが現在の大学である。いさゝか荒っぽい図式化ではあるが、現状から判断すると両者の距離は日毎に大きくなりこそすれその差を縮める方向に向っているとは思えない。おそらく、真剣な相談のために相談室を訪れる学生は非常に限られたものでしかない。本人の手には抱えきれないような問題を抱えて私を訪れてくる学生に接する度に、「多分これは永山の一角にすぎないのだろう。もっと大きな悩みや不安をもった学生が多数いるにちがいない……。」という思いが胸をよぎる。そして事実そのなのであるから、両者の意識や価値感のずれは明白である。

この現実からみて現代の学生の意識及び行動の顕著な点を整理すると主なものとしては次のような項目を挙げることができる。

- ① 生活の基本的ルールを身につけていない。
- ② 欲求が細分化している。
- ③ 生活のパターンが画一的である。
- ④ 思考や行動に持続性・統一性が乏しい。
- ⑤ 帰属意識が薄い。
- ⑥ 表面的で並列的な思考傾向が強い。

当今の学生は日本経済が順調に展開した高度成長下に育ち、幼い時から不自由を知らない生活を続けてきたきわめて恵まれた環境におかれている。その反面、受験戦争に背を向けることはできない条件、親も受験のためなら他の事は全て犠牲にしてもいとわないというおかしなことが平気でまかり通る風潮の中で子供達の心はいつの間にか歪められている。心ばかりでなく、①に挙げたように日常生活における基本的な躰さえ受けずに大きくなった学生が多いのである。これは結局、社会生活への適応性を欠くものでしかなく、大学生の段階ですでに支障

をきたしている例は枚挙にいとまがないほどである。また、社会が物質的に豊かになるにつれ人間の関心や欲求はより多様になり細分化されるが、選択の可能性が大きいほど人々は自分が真に求めているのは何であるのか決めかねて欲求不満に陥りやすくなる。この欲求不満を解消するにはどうしたらよいか分らず、生活に消極的になったり、次元の異なることに不満のはけ口を求めたりする傾向がある。項目③の生活パターンの画一化は補足説明する必要がないほど指摘されていることであるが、マス・メディアの発達により一方的かつ大量に与えられる情報の受け手と化した結果である。これは一見、学生々活に深刻な影響を及ぼすほどのことではないようにみえるが行動様式が画一化するとパターンの枠外のことについては無関心になったり、無関心を装うという閉ざされた方向へ傾斜する。無関心が学生の心を占有するようになると「生きがい」を見出すことは難しく、「倦怠感」におそわれ、行動面も思考面にも積極性がなくなってくる。学生同志で心を開くことが少くなり、そこにはもう連帯感の生まれる基盤は弱く、ひとりひとり点の存在と化し孤立化が目立つようになる。こうなると自己の不満や不安を内在させたまま常に精神の不安定と共存している状態から脱け出すことが難しくなる。これは⑤と関連してくるが、自分は〇〇大学の学生であるという確たる自覚や積極的な参加意欲は非常に弱くなる。究極のところ、帰属意識や連帯感よりも、「楽しい生活」、「自分なりの生活」がしたいと考える方が強くなる。どこの大学でもクラブ活動が以前より活発ではないというのもこの現象のひとつのあらわれであると考えられる。「自分なりの生活」といってもこれがが当人の価値感に基づく独自のものであれば歓迎できるが、単に流行に踊らされたパターンを追っているにすぎないことが多々ある。⑥として挙げた表面的・並列的思考はやはりテレビやマンガの影響である。映像を通してイメージ優先、感覚優先となり、論理の構築とか論理の積み重ねによる他者とのコミュニケーションなどということからはずい分と遠くなってしまっているのである。

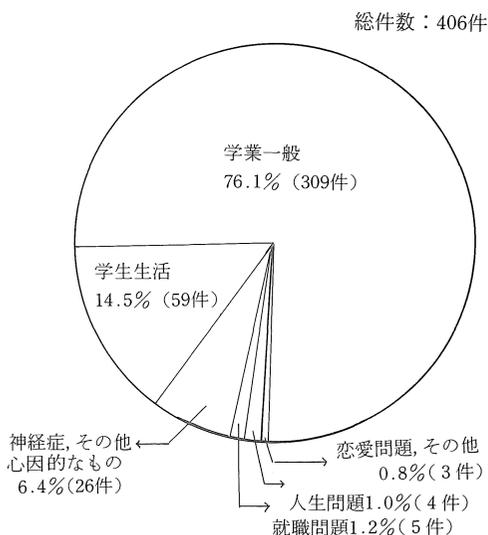
以上のようなことは実際に学生と接すれば遅かれ早かれ理解できるが、要は、学生達が今ある条件の下で彼らなりに価値感を見出そうとし、生きていこうとしている点が重要なのである。時代は変ってゆく。全てが変ってゆく。大学という社会も、学生達だけでなく大学側の人間も社会の動きに対応して変ってゆくべきではないだろうか。決して迎合ではないが、現状の適確な把握と理解しようと努める態度はあらゆる立場の人に要求されると考える。自分の経てきた時代の価値感のみに固執することは無意味であるし危険でもある。固執ではなく、

迎合でもない対応は組織体としてすぐに切換えることは難しいが、個人としては柔軟な心で接することにより決して不可能ではない。カウンセリングをしているとこのような思いにとらわれることがよくある。

III. 統計の裏に潜むもの

例年の報告書と同様に今回も相談内容の内訳を図示すると以下のようなものである。学業と学生生活（留年問題も含む）に関するものが過半数を占めるのは過去2年間と大差ない。ここで各項目について説明を加える必要はあまりないと思うので、それらの問題を全て反映しているともいえる「留年」について述べてみたい。

1. 相談内容（昭和54年2月～昭和55年1月）



病気休学による留年は別として、留年する学生のタイプには、どこかなげやりな雰囲気がある。学習意欲の減退、生活意欲の減退などのため所定の単位を修得できずに留年となるケースが多い。留年するのではなく、留年となるというところが問題である。年々大学は大衆化し（それ自体はむしろ歓迎すべきことである）、多様な家庭の子弟が大学生となる。大学入学が最大眼目の如き高校教育を受ける。親が子にかけた期待も大学へ進学させようとする意図もまた様々である。「大学に入りたい」「勉強したい」という積極的な意志の有無はこの際問わないという本人の意志よりも「何がなんでも大学だけは行ってもらいたい」とする親の気持の方が先行して、結果的には「留年」を招いたというケースが少くない。相談室を訪れる学生には例外なくこうした家庭環境が顔をのぞかせる。相談室の業務の一環として、問題のある学生ま

たその保護者に対して電話による働きかけをおこなっているが、親の反応というものはまことに種々様々である。相談室を直接訪れる父親や母親の数も年間になると相当数ある。学生だけでなく親達との接触から得たことは、留年にしろ、人生問題にしろ、何か問題を抱えている学生は必ずといっても過言でないほどにその端は家庭から発している。中には、学生本人よりむしろその父親なり母親の方こそカウンセリングを必要とするケースがあり、筆者も実際これに費やした時間は大きな比重を占めている。

戦後、教育の機会均等の名のもとに誰もが高校へ、大学へと進む。これは経済の高度成長により実現可能となったのであるが、受験システムの方はこの変化に対応できるほどの変化はしていないため、結果として「受験のための勉強」が高校、中学校、はたまた小学校でさえも年々過酷になっている。このような子供時代を経て大学生になった彼らが心のひずみを種々の形で表わしても当然のことかもしれないのである。人間性を豊かにはぐくむ環境から遠く隔った現代社会の病理現象が学生相談室に吹き寄せられてくるというわけである。

次の表は、当相談室過去3年間の相談件数及び内訳である。原稿締切期日の関係上各年正確に12ヶ月ずつの数字とはなっていないが、およその参考にはなると思う。

これで見ると、毎年「学業一般」「学生生活」「神経症など心因的なもの」の3項目で件数の90%以上を占めている。とりわけ「学業一般」の増加が目立つ。内容的には「留年」に関する問題が増えている。しかし、このような分類の仕方は便宜的にすぎず、実際には多岐にわたる要因がどのケースにも認められる。1件のカウンセリングについて必ずどこかで複数の因子がオーバーラップしていることを考えると、数字の裏に潜む複雑な様相が理解頂けるかもしれない。

2. 相談内容の各年比較

(昭和52年4月～昭和55年1月)

| | 昭和52・4～53・3 | | 昭和53・4～54・1 | | 昭和54・2～55・1 | |
|----------------|-------------|-------|-------------|-------|-------------|-------|
| 学 業 一 般 | 133件 | 37.3% | 202件 | 57.5% | 309件 | 76.1% |
| 学生生活一般 | 72 | 20.2 | 61 | 17.5 | 59 | 14.5 |
| 神経症, その他心因的なもの | 128 | 36.0 | 56 | 16.0 | 26 | 6.4 |
| 就 職 問 題 | 7 | 2.0 | 11 | 3.2 | 5 | 1.2 |
| 恋 愛 問 題 | 9 | 2.5 | 10 | 2.9 | 2 | 0.5 |
| 人 生 問 題 | 5 | 1.4 | 9 | 2.0 | 4 | 1.0 |
| そ の 他 | 2 | 0.6 | 1 | 0.3 | 1 | 0.3 |
| 計 | 356件 | | 350件 | | 406件 | |

IV. むすび

問題の複雑性を考えると、学生の厚生補導とは何であるかという素朴な、しかし容易ではない問いにつきあたる。組織面からいえば、学生相談室や学生部だけでなく、原則として全学を挙げて取組むべきことである。この基本的な認識がどの大学においてもまだ統一しておらず、運営上もスムーズには運ばない。欧米、ことに米国では「カウンセリング」は社会のどの分野でも重要不可欠であるという認識が定着しており、高度な専門職として評

価されて多くの人々が従事し、究明に励んでいる。大学生に対するカウンセリングもよくゆきとどいていることは言うまでもない。

日本には日本の実情に合うカウンセリングが必要なことは当然であるから、大学としては組織上も機能上からも模索の状態から早急に脱け出すことが当面の課題である。本学においても関係者全員それぞれの立場から真剣に考えて頂き、具体的、建設的な御意見や御指導を賜りたくお願いいたします。

(受理 昭和55年1月16日)